

問題の解答

一部の問題について、計算過程や解説をまとめる。

第1章

練習問題

1.1 A, B, C が取り出したカードを順番を考慮せず $\alpha < \beta < \gamma$ とする。この中で A, B, C が γ を引く確率は等しいので、3 者とも $1/3$ である。

1.6 $(k/6)^n - ((k-1)/6)^n$. 最初に $X_n \leq k$ となる確率を求めるとよい。

1.8 n 組の場合の完全順列の個数を a_n とすると、漸化式 $a_{n+1} = n(a_n + a_{n-1})$, ($n \geq 2$) が成り立つ。 $a_1 = 0$, $a_2 = 1$ である。変形すると, $a_{n+1} - (n+1)a_n = -(a_n - na_{n-1})$ となるので, $a_n - na_{n-1} = (-1)^n$ が成り立つ。これから $\frac{a_n}{n!} - \frac{a_{n-1}}{(n-1)!} = \frac{(-1)^n}{n!}$ が得

られるので, 確率 $= \frac{a_n}{n!} = \sum_{k=1}^n \frac{(-1)^k}{k!}$.

1.9 $0.3 \times (1 - 0.7^n) / (1 - 0.7) > 0.9$ より $n > 6.456$. 故に 7 回以上。

1.11 $f = {}_n C_m \left(\frac{3}{5}\right)^m \left(\frac{2}{5}\right)^{n-m}$ とおく。 $m = n/2$ のとき $f \approx \left(\frac{2\sqrt{6}}{5}\right)^n \approx 0.9798^n$.

1.12 $A - B = C$ とおくと B と C は排反事象。 $P(B \cup C) = P(B) + P(C)$ で $P(C) \geq 0$ より証明される。

1.13 対偶を取って計算する。

1.15 $n_k \ll g_k$ とすると G の表式が得られる。 $\log G$ を計算し変分を取ると, $n_k = \exp\left[-\frac{\epsilon_k - \mu}{k_B T}\right]$ となる。

1.19 C_3 を 2 つの黒球のある事象とすると $P(C_1) = P(C_2) = P(C_3) = 1/3$. ベイズの公式 (1.9), (1.10) で事象を一つ追加した公式

$$P(C_i | D) = \frac{P(C_i)P(D|C_i)}{P(C_1)P(D|C_1) + P(C_2)P(D|C_2) + P(C_3)P(D|C_3)} \quad (i = 1, 2, 3)$$

で計算することになるが, $P(D|C_3) = 0$ なので $P(C_3|D) = 0$ となる。さらに, $P(C_1|D)$, $P(C_2|D)$ も同じ値となる。

第2章

問

2.1 $E[(\lambda X + Y)^2] \geq 0$ を λ のべきに展開し, 判別式 ≥ 0 より $(E[XY])^2 \leq E[X^2]E[Y^2]$ が求まる. 上の式で X に $X - \bar{X}$, Y に $Y - \bar{Y}$ を代入すると $|C[X, Y]| \leq \sigma_X \sigma_Y$ が得られる.

2.2 $\rho[X, Y] \propto C[X, Y] = E[(X - \bar{X})(Y - \bar{Y})] = E[X - \bar{X}]E[Y - \bar{Y}] = 0$.

2.3 期待値の線形性によって $V[Z] = E[(aX + bY - a\bar{X} - b\bar{Y})^2] = E[a^2(X - \bar{X})^2] + E[b^2(Y - \bar{Y})^2] + E[2ab(X - \bar{X})(Y - \bar{Y})]$.

2.4 $|S| \leq \sqrt{K}$ は $|\mu_3| \leq \sigma\sqrt{\mu_4}$ と同値. これは $|E[(X - \bar{X})^3]|^2 \leq E[(X - \bar{X})^2]E[(X - \bar{X})^4]$ と同値であることより証明される.

練習問題

2.1 $P(A \cap B^C) = P(A \cap (\Omega - B)) = P(A) - P(A \cap B)$ より証明される.

2.2 θ を針の中心から直線へ下ろした垂線と針とのなす角度とし, x をこの垂線の長さとする. すると $\theta = \cos^{-1} 4x$. θ と x が一様に分布すると考えると 確率 $= \int_{-1/4}^{1/4} \frac{2}{\pi} \cos^{-1} 4x \, dx = \frac{1}{\pi}$ となる.

2.3 間隔 $2r$ で平行線を引き詰めた平面に, 半径 r の円を投げたときの確率は, 円に無作為に弦を引き, その弦と円の中心 O との距離を x としたとき, x の分布が一様であることに対応する. 従って確率は x が $r/2$ より大きい場合で $1/2$ となる. 半径 r の円に長い針を無作為に投げたときの確率は, 円に無作為に弦を引き, その中点 M が円内に一様に分布することに対応する. 従って確率は点 M が半径 r の円と中心を共有する半径 $r/2$ の円内にある場合で $1/4$ である.

2.4 適当な a, b を取り, X_1, X_2 に対して $P(\{X_1 + X_2 \leq a\} \cap \{X_1 - X_2 \leq b\}) \neq P(\{X_1 + X_2 \leq a\})P(\{X_1 - X_2 \leq b\})$ となることを示せ.

2.5 $E[X] = \int_{-\infty}^{\infty} u \, dF(u) = \int_{-\infty}^a u \, dF + \int_a^{\infty} u \, dF = \int_{-\infty}^a \{d(uF) - F \, du\} - \int_a^{\infty} u \, d(1 - F)$ より示される.

2.6 $E[X^2] = \int_{-\infty}^{\infty} u^2 \, dF = \int_0^{\infty} u^2 \, dF = - \int_0^{\infty} u^2 \, d(1 - F)$ より示される.

2.13 式 (2.41) の両辺を b で微分せよ.

2.14 $\rho[X, Y] = \pm 1$ のとき, $X' = X - \bar{X}$, $Y' = Y - \bar{Y}$ とすると, $E[(\lambda X' + Y')^2] = 0$ が, 重根 $\lambda_d = -E[X'Y']/E[X'^2]$ によって実現される. このとき $\lambda_d X' + Y' = 0$ となり, $Y = -\lambda_d(X - \bar{X}) + \bar{Y}$ が得られる.

第 3 章

問

3.1 $\int_{-\infty}^{\infty} e^{-t^2} \, dt = \sqrt{\pi}$ を利用せよ.

3.2 $\int_{-\infty}^{\infty} t^4 e^{-t^2} \, dt = \frac{3}{4}\sqrt{\pi}$ を利用せよ.

3.3 $\phi(k) = e^{C_1(ik) - C_2k^2/2}$. $C_2 = 0$ の場合, $\phi(k) = e^{C_1(ik)}$ で, 平均が C_1 の単位分布となるので正しくない.

3.4 $C_{m_1 m_2 \dots m_l} = \frac{\partial}{\partial(ik_1)^{m_1}} \frac{\partial}{\partial(ik_2)^{m_2}} \dots \frac{\partial}{\partial(ik_l)^{m_l}} \left(ik \cdot \mu - \frac{1}{2} {}^t k A^{-1} k \right) \Big|_{k=0}$. これから明らかに $|m_1| + |m_2| + \dots + |m_l| \geq 3$ なら $C_{m_1 m_2 \dots m_l} = 0$.

3.5 $|A| = a_{11}a_{22} - a_{12}a_{21} = \sigma_2^2|A|\sigma_1^2|A| - \rho^2\sigma_1^2\sigma_2^2|A|^2$. これから $|A|^{-1} = \sigma_1^2\sigma_2^2(1 - \rho^2)$ となることより得られる.

3.6 $E[(X - Y)^4] = E[X^4] + 6E[X^2]E[Y^2] + E[Y^4]$ を利用する.

3.8 $\phi(k) = \frac{\lambda}{\pi} e^{ik\mu} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{e^{ikt}}{t^2 + \lambda^2} dt$. $k > 0$ なら複素平面の上半面を回る積分路, $k < 0$ なら複素平面の下半面を回る積分路を取ることで式 (3.18) が得られる.

3.9 $E[e^{tX}] = \frac{\lambda}{\pi} e^{t\mu} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{e^{ty}}{y^2 + \lambda^2} dy$. これから明らかに $t \neq 0$ なら積分が収束しないことがわかる.

3.10

$$\int_{-\infty}^{\infty} dx \exp \left[-\frac{(x - \mu_x)^2}{2\sigma_x^2} + x \right] = \int_{-\infty}^{\infty} dx \exp \left[-\frac{1}{2\sigma_x^2} \left\{ x - (\mu_x + \sigma_x^2) \right\}^2 + \left(\mu_x + \frac{\sigma_x^2}{2} \right) \right]$$

より得られる.

3.11 $X_1 = (Y_1 + Y_2)/2$, $X_2 = (Y_1 - Y_2)/2$ より, $g(y_1, y_2) = \frac{1}{2} f \left(\frac{y_1 + y_2}{2}, \frac{y_1 - y_2}{2} \right)$.

$f(x_1, x_2) = \frac{1}{2\pi\sigma^2} \exp \left[-\frac{(x_1 - \mu)^2 + (x_2 - \mu)^2}{2\sigma^2} \right]$ へ, $y_1 = x_1 + x_2$, $y_2 = x_1 - x_2$ を代入すると $g(y_1, y_2)$ が y_1 の関数と y_2 の関数の積になる.

練習問題

3.2 $\phi(k)$ が $k = 0$ で解析的でないことから明らか.

3.7 $y = x^\alpha$ とおく. Y の確率密度関数を $g(y)$ とすると, $g(y)dy = f(x)dx$ より $g(y) = \lambda e^{-\lambda y}$.

3.8 $E[e^X] = \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma^2}} \int_{-\infty}^{\infty} dx \exp \left[-\frac{(x - \sigma^2) - \sigma^4}{2\sigma^2} \right] = \exp \left[\frac{1}{2}\sigma^2 \right]$.

3.9 適当な直交行列 T により

$$A' = T^{-1}AT = \begin{pmatrix} \alpha_1 & & & 0 \\ & \alpha_2 & & \\ & & \dots & \\ 0 & & & \alpha_n \end{pmatrix}$$

となることから明らか.

3.10 明らか.

3.16 $P(X = k) \approx e^{-\lambda t} \lambda \Delta t$. $\Delta P(X \geq t) = -P(X = k)$ を解くと得られる.

3.17 長さが x_{S+1} である区間の両端の点を S と $S+1$ とする ($0 \leq S \leq n-1$). 点 S まで位置が確定したとし, 非常に小さい長さの区間 dx を右方向へ無数に延長する. $\lambda = (n-1)/l$ とすると, 点 $S+1$ が無限小区間 dx へ入る確率は $p = \lambda dx$ となる. 点 $S+1$ が $m+1$ 番目の小区間に入ったとする. $mp = m\lambda dx \approx x_{S+1}\lambda$, $q = 1 - p \approx 1 - \lambda x_{S+1}/m$ であるから, 点 $S+1$ が $m+1$ 番目の小区間に入る確率は

$$q^m p = \left(1 - \lambda \frac{x_{S+1}}{m}\right)^m \lambda dx \approx \lambda e^{-\lambda x_{S+1}} dx$$

となる.

3.18 $B \subset A$ のとき, $P(B|A) = P(B)/P(A)$ なので

$$P(T > t + s | T > t) = \frac{P(T > t + s)}{P(T > t)} = \frac{e^{-\lambda(t+s)}}{e^{-\lambda t}} = e^{-\lambda s} = P(T > s)$$

3.19 f の特性関数が $\phi(k) = \frac{\lambda}{\lambda - ik}$ となることから $f * f * \dots * f$ の特性関数は

$$\{\phi(k)\}^n = \frac{\lambda^n}{(\lambda - ik)^n} \text{ なる. 公式(2.72) より } f * f * \dots * f = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \{\phi(k)\}^n e^{-ikx} dk = \frac{\lambda^n}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{e^{-ikx}}{(\lambda - ik)^n} dk.$$

複素積分の公式を用いると $f * f * \dots * f = \lambda^n \frac{x^{n-1}}{(n-1)!} e^{-\lambda x}$ が得られる.

3.20 $X_1 + X_2$ の特性関数は $\phi(k) = \frac{\lambda_1 \lambda_2}{(\lambda_1 - ik)(\lambda_2 - ik)}$ で, 公式(2.72) より確率密度

$$\text{関数 } f(x) \text{ は } f(x) = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{\lambda_1 \lambda_2}{(\lambda_1 - ik)(\lambda_2 - ik)} e^{-ikx} dx = \frac{\lambda_1 \lambda_2}{\lambda_2 - \lambda_1} (e^{-\lambda_1 x} - e^{-\lambda_2 x}).$$

3.22 Z の分布関数を $F_Z(z)$ とすると

$$F_Z(z) = P(\{Z \leq z\}) = P\left(\left\{\frac{X}{\sqrt{Y/n}} \leq z\right\}\right) = \int_0^{\infty} P\left(\left\{X \leq \sqrt{\frac{y}{n}} z\right\}\right) P(\{y < Y \leq y + dy\})$$

となり, これから $f_Z(z) = F'_Z(z) = \int_0^{\infty} \sqrt{\frac{y}{n}} f_X\left(\sqrt{\frac{y}{n}} z\right) f_Y(y) dy$, $f_X = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-x^2/2}$,

$f_Y = \frac{1}{2^{n/2} \Gamma(n/2)} y^{n/2-1} e^{-y/2}$ となる.

第4章

問

4.1 X_n が X に確率収束しないのに, $\lim_{n \rightarrow \infty} X_n = X$ (a.e.) となったとする. すると $\exists \epsilon > 0$ に対して $\delta > 0$ が存在して, n をいくら大きくしても $P(\{|X_n - X| > \epsilon\}) > \delta$ となる. これは $|X_n - X| > \epsilon$ となる ω の測度がゼロでないことを意味しているので, $\lim_{n \rightarrow \infty} X_n = X$ (a.e.), つまり $\lim_{n \rightarrow \infty} |X_n - X| = 0$ (a.e.) と矛盾する.

練習問題

4.1 S_n, X_i ($1 \leq i \leq n$) を例 2 と同じ確率変数とする. $Q_n = \frac{S_n}{\sqrt{n}} - p\sqrt{n}$ の特性関数を $\phi_n(k)$ とすると $\phi_n(k) = (pe^{ik/\sqrt{n}} + q)^n \exp(-ikp\sqrt{n})$ となり, $n \rightarrow \infty$ で $\log \phi_n(k) \rightarrow -\frac{1}{2}pk^2$ すなわち $\lim_{n \rightarrow \infty} \phi_n(k) = e^{-pk^2/2}$.

4.2 $Q_n = S_n/n = (X_1 + X_2 + \cdots + X_n)/n$ の特性関数を $\phi_n(k)$ とすると

$$\phi_n(k) = (e^{-|k|\lambda/n + ik\mu/n})^n = e^{-|k|\lambda + ik\mu}$$

4.3 $Q_n = S_n/\sqrt{n} - \sqrt{n}\mu$ の特性関数を $\phi_n(k)$ とすると

$$\phi_n(k) = (e^{-|k|\lambda/\sqrt{n} + ik\mu/\sqrt{n}})^n \times \exp(-ik\mu\sqrt{n}) = e^{-|k|\sqrt{n}\lambda}$$

となり $\lim_{n \rightarrow \infty} \phi_n(k) = 0$ である.

4.4 例 3.5 より, S_n はパラメータが n (平均が n) のポアソン分布に従うので, $S_n = k$ となる確率 $P_k = \frac{n^k}{k!}e^{-n}$ となる. 一方, 中心極限定理によって $(S_n - n)/\sqrt{n}$ は $n \rightarrow \infty$ のとき, $N(0, 1)$ へ近づぐことから表式が得られる.

4.5 $S_p(\ell) \propto e^\alpha \ell^\beta$ とおく. 次に速度を u とすると, $S_p(\ell)$ の次元が u^p と同じであることを用いる.

4.6 練習問題 3.3 より y が対数正規分布に従うとき $(E[y])^n = \exp\left[\frac{1}{2}\sigma_x^2 n + \mu_x n\right]$, $E[y^n] = \exp\left[\frac{1}{2}\sigma_x^2 n^2 + \mu_x n\right]$. これから $E[y^n] = (E[y])^n \exp\left[\frac{1}{2}\sigma_x^2 n^2 - \frac{1}{2}\sigma_x^2 n\right]$ で, これは n が任意の実数 q のときも成立する. $y \rightarrow \epsilon$, $\sigma_x \rightarrow \sigma$ とすると結果が得られる.

第 5 章

問

5.1 ${}_{2n}C_n = \frac{2n(2n-1)}{n^2} {}_{2n-2}C_{n-1}$ を利用する.

5.3 $p_{00}(2n)$ は n 回右へ, n 回左へ進む確率.

5.4 $p_{00}(2n+1) = 0$ は明らか. $p_{00}(2n)$ は右へ l 回, 左へ l 回, 上へ m 回, 下へ m 回で $l+m=n$.

練習問題

5.4 特別解が $R_g = A + B(q/p)^g$ となり, 境界条件を当てはめると $R_g = \frac{(q/p)^b - (q/p)^g}{(q/p)^b - 1}$ が得られる.

5.8 $X_n = i$ のとき状態 i にあるとすると, マルコフ連鎖になることは明か. $p_{ij} = \frac{1}{3}$ ($j = i+2$), $\frac{1}{2}$ ($j = i-1$), $\frac{1}{6}$ ($j = i$), 0 (その他).

5.9 $Z_{n+1} = Z_n + 1$ (3, 6), $Z_n = Z_n + 1$ (1, 2, 4, 5). $Z_n = i$ のとき状態 i と呼ぶことにすると, $p_{i,i-1} = \frac{1}{3}$, $p_{i,i+1} = \frac{2}{3}$, $p_{ij} = 0$ (それ以外) となる.

5.10 $Z_{n+1} = |Y_n - X_n - 1|$ (1, 3, 5), $Z_{n+1} = |Y_n - X_n + 1|$ (2, 4, 6). Z_{n+1} は $Z_n = |Y_n - X_n|$ だけでは決まらないのでマルコフ連鎖にならない.

5.14 明らかに $P_{00}(2n+1) = 0$. $2n$ 回目に原点に復帰するのは, $2n = 2l + 2m$ として, 左右にそれぞれ l ステップ, 上下に m ステップ動く場合である. 従って

$$P_{00}(2n) = \sum_{l+m=n} \frac{(2n)!}{l!l!(n-l)!(n-l)!} \left(\frac{1}{4}\right)^{2n} = \left(\frac{1}{4}\right)^{2n} \binom{2n}{2n}^2. \text{ スターリングの公式}$$

により $P_{00}(2n) \approx \frac{1}{n\pi}$. これから $\sum_{n=0}^{\infty} P_{00}(n) = \infty$.

5.15 スターリングの公式を用いると $2n C_n \approx \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \frac{(2n)^{2n+1/2}}{n^{2n+1}}$ となるから $u_{2n} \approx \frac{1}{\sqrt{\pi k}}$. $p_{2k,2n}$ も同様にして得られる.

5.16 練習問題 5.14 より, $p_{2k,2n} \approx \frac{1}{\pi \sqrt{k(n-k)}}$. $x = k/n$ とおくと

$$\text{確率} = \frac{1}{\pi} \int_0^\alpha \frac{1}{\sqrt{k(n-k)}} n dx = \frac{1}{\pi} \int_0^\alpha \frac{dx}{\sqrt{x(1-x)}} = \frac{2}{\pi} \sin^{-1} \sqrt{\alpha}$$

第 6 章

問

6.1 確率連続の式より $\lim_{t \rightarrow t_0} P(\{|X(t) - X(t_0)| < \epsilon\}) = 1$. $X(t)$ は確率変数でないので上の条件は任意の $\epsilon > 0$ に対して $\lim_{t \rightarrow t_0} |X(t) - X(t_0)| < \epsilon$ に帰着する.

6.2 条件を繰り返し用いると, 整数 n に対して $f(n\Delta t) = n f(\Delta t)$. 同様にして非ゼロの整数 m に対して $f\left(\frac{1}{m}\Delta t\right) = \frac{1}{m} f(\Delta t)$. これらを組み合わせると $f\left(\frac{n}{m}\Delta t\right) = \frac{n}{m} f(\Delta t)$ となるので, 任意の有理数 r に対して $f(r\Delta t) = r f(\Delta t)$ が成立する. $f(t)$ は連続関数なので, すべての数 α に対して $f(\alpha\Delta t) = \alpha f(\Delta t)$. $\Delta t = 1$ と取ると $f(\alpha) = \alpha f(1)$.

練習問題

6.1 $W(t_{k-1})^3(W(t_k) - W(t_{k-1})) = \frac{1}{4}(W(t_k)^4 - W(t_{k-1})^4) - \frac{1}{4}W(t_k)^2(W(t_k) - W(t_{k-1}))^2 - \frac{3}{4}W(t_{k-1})^2(W(t_k) - W(t_{k-1}))^2 - \frac{1}{2}W(t_{k-1})W(t_k)(W(t_k) - W(t_{k-1}))^2$ を利用する.

6.2 $W(s) - W(t)$ は正規分布 $N(0, s-t)$ に従うので, $\sqrt{c}(W(s) - W(t))$ は $N(0, c(s-t))$ に, $(W(cs) - W(ct))$ は $N(0, c(s-t))$ に従う.

6.3 $W(t) - W(0)$ が正規分布 $N(0, t)$ に従うことから明らか.

6.10 $P(\{X(s) = k\}) = e^{-\lambda s} \frac{(\lambda s)^k}{k!}$ より $P(\{X(t) - X(t_0) = 0\}) = e^{-\lambda(t-t_0)}$.

これは $P(\{T_1 = t_1 - t_0 > t - t_0\}) = e^{-\lambda(t-t_0)}$ を意味する. 従って T_1 の分布関数を $F(x)$ とすると $F(x) = 1 - P(\{T_1 > x\}) = P(\{T_1 \leq x\}) = 1 - e^{-\lambda x}$. 故に指数分布となる. T_1, T_2, \dots, T_n が独立で同じ指数分布となることは明らか.

第 7 章

問

7.3

$$\text{a. } 1 = \int_{-\infty}^{\infty} d_z F(x, t - \Delta t; z, t) \text{ より } F(x, t; y, s) = \int_{-\infty}^{\infty} F(x, t; y, s) d_z F(x, t - \Delta t; z, t) \quad \dots (k.1)$$

$$\text{b. } F(x, t - \Delta t; y, s) = \int_{-\infty}^{\infty} F(z, u; y, s) d_z F(x, t - \Delta t; z, u) \quad (t - \Delta t < u < s) \quad \dots (k.2)$$

式 (k.2) で $u = t$ において ((k.2) - (k.1))/ Δt とすると得られる.

$$\text{c. } \frac{1}{\Delta t} [F(x, t - \Delta t; y, s) - F(x, t; y, s)] = \frac{1}{\Delta t} \left(\int_{|z-x| \geq \delta} + \int_{|z-x| < \delta} \right) [F(z, t; y, s) - F(x, t; y, s)] d_z F(x, t - \Delta t; z, t).$$

$$\text{d. } F(z, t; y, s) - F(x, t; y, s) = \frac{\partial F}{\partial x} (z - x) + \frac{1}{2} \frac{\partial^2 F}{\partial x^2} (z - x)^2$$

$$\text{e. } \frac{1}{\Delta t} [F(x, t - \Delta t; y, s) - F(x, t; y, s)] = \frac{1}{\Delta t} \int_{|z-x| < \delta} (z - x) \frac{\partial F}{\partial x} d_z F(x, t - \Delta t; z, t) + \frac{1}{2\Delta t} \int_{|z-x| < \delta} (z - x)^2 \frac{\partial^2 F}{\partial x^2} d_z F(x, t - \Delta t; z, t). \text{ 故に } \frac{\partial F}{\partial t} = -a(x, t) \frac{\partial F}{\partial x} - \frac{1}{2} b(x, t) \frac{\partial^2 F}{\partial x^2}.$$

練習問題

7.1 $C[X(t), X(s)] = \cos \omega(t - s)$. 定理 7.2 より $X(t)$ は弱定常過程.

7.2 $E[X(t)] = 0$. $C[X(t), X(s)] = E[X(t)X(s)] = E[\cos^2 C] \cos \omega(t - s)$.

7.4 ラプラス変換 $U(x, s) = \int_0^{\infty} e^{-st} u(x, t) dt$ から式 (7.56) が得られる. 式 (7.57) は式 (7.55) の両辺を $-\infty$ から ∞ へ積分する.

7.5 方程式 (7.56) を解くと $U(x, s) = A e^{-\sqrt{2s}|x|}$. $u(x, 0) = \delta(x)$ を仮定すると, $A = 1/\sqrt{2s}$. ラプラス逆変換の積分 $u(x, t) = \frac{1}{2\pi i} \int_{s_0 - i\infty}^{s_0 + i\infty} e^{st} \frac{1}{\sqrt{2s}} e^{-\sqrt{2s}|x|} dx$ を s 面の実数軸の $s \leq 0$ に切断を入れて $\text{Args} = -\pi$ に沿って $-\infty$ から 0 まで, $\text{Args} = \pi$ に沿って 0 から ∞ まで積分すると, 解

$$u(x, t) = \frac{1}{\sqrt{2\pi t}} e^{-\frac{x^2}{2t}}$$

が得られる.

7.6 $X(t)$ がガウス過程なら, 特性汎関数 $\phi(k(t))$ は式 (7.1) となる. $k(t) = \int_{-\infty}^{\infty} \widehat{k}(\omega) e^{i\omega t} d\omega$ とする. $\check{k}(\omega) = 2\pi\widehat{k}(-\omega)$ とおくと $\int_{-\infty}^{\infty} X(t)k(t) dt = \int_{-\infty}^{\infty} \widehat{X}(\omega)\check{k}(\omega) d\omega$ となる. これから $\int_{-\infty}^{\infty} \int_{-\infty}^{\infty} ds dt E[X(t)X(s)]k(t)k(s) = \int_{-\infty}^{\infty} d\omega d\omega' E[\widehat{X}(\omega)\widehat{X}(\omega')]$. 同様に $\int_{-\infty}^{\infty} \int_{-\infty}^{\infty} ds dt k(t)C[X(t), X(s)]k(s) = \int_{-\infty}^{\infty} d\omega d\omega' \check{k}(\omega)C[\widehat{X}(\omega), \widehat{X}(\omega')]\check{k}(\omega')$. 故に $\psi(\check{k}(\omega)) = E \left[\exp \left(i \int_{-\infty}^{\infty} \widehat{X}(\omega)\check{k}(\omega) d\omega \right) \right]$
 $= \exp \left\{ i \int_{-\infty}^{\infty} E[\widehat{X}(\omega)]\check{k}(\omega) d\omega - \frac{1}{2} \int_{-\infty}^{\infty} \int_{-\infty}^{\infty} \check{k}(\omega)C[\widehat{X}(\omega), \widehat{X}(\omega')]\check{k}(\omega') d\omega d\omega' \right\}$.

第 8 章

問

8.1 $\int_0^1 f_x(x) dx = \frac{1}{\pi} \int_0^1 \frac{1}{\sqrt{x(1-x)}} dx = 1$ で, $f_x(x) \geq 0$ より条件を満たしている. なお $x = \sin^2 \theta$ と変数変換すればよい.

練習問題

8.1 定理 8.5 の式 (8.13) へ $f(x, t)$ を代入すると, f がコルモゴロフ・フェラーの後ろ向き方程式を満足することから $df = f_x(x, t)b(t)dW(t)$ となる. 伊藤積分をすると $\int_{t_0}^T df = f(X(T), T) - f(X(t_0), t_0) = \int_{t_0}^T b(t)f_x(x(t), t) dW(t)$ が得られる. 両辺の期待値を取ると, 伊藤積分の期待値はゼロなので $f(x, t) = E[f(X(T), T)] = E[\psi(X(T)) | X(t) = x]$ が得られる.

8.5 $f(k_1, k_2, k_3, k_4) = \sum_{i,j=1}^4 k_i H_{ij} k_j$ とするとき

$$\begin{aligned} \frac{\partial^4}{\partial k_1 \partial k_2 \partial k_3 \partial k_4} e^f \Big|_{\mathbf{k}=0} &= \frac{\partial^2}{\partial k_1 \partial k_2} e^f \Big|_{\mathbf{k}=0} \frac{\partial^2}{\partial k_3 \partial k_4} e^f \Big|_{\mathbf{k}=0} \\ &+ \frac{\partial^2}{\partial k_1 \partial k_3} e^f \Big|_{\mathbf{k}=0} \frac{\partial^2}{\partial k_2 \partial k_4} e^f \Big|_{\mathbf{k}=0} + \frac{\partial^2}{\partial k_1 \partial k_4} e^f \Big|_{\mathbf{k}=0} \frac{\partial^2}{\partial k_2 \partial k_3} e^f \Big|_{\mathbf{k}=0} \end{aligned}$$

となることから, $E[\widehat{u}(k)\widehat{u}(l)\widehat{u}(m)\widehat{u}(n)] = E[\widehat{u}(k)\widehat{u}(l)]E[\widehat{u}(m)\widehat{u}(n)] + E[\widehat{u}(k)\widehat{u}(m)]E[\widehat{u}(l)\widehat{u}(n)] + E[\widehat{u}(k)\widehat{u}(n)]E[\widehat{u}(l)\widehat{u}(m)]$.

8.7 (a) 定常解 $\bar{X} = \bar{Y} = \bar{Z} = 0$ に対しては, $\mu < 1$ のとき, 3 実根ですべて負なので定常解は安定. $\mu \geq 1$ のとき, 2 実根は負, 1 実根が正 (ゼロ ($\mu = 1$)) なので定常解は対流型不安定.

(b) 定常解 $\bar{X} = \bar{Y} = \pm\sqrt{b(\mu-1)}$, $\bar{Z} = \mu - 1$ に対しては, $\mu > 1$ のとき, 1 実根は負, 2 根が複素共役である. $\mu_T = Pr(Pr + b + 3)/(Pr - b - 1)$ とおくと, $\mu < \mu_T$ のときは複素根の実部は負なので安定, $\mu \geq \mu_T$ のときは複素根の実部は正 (ゼロ ($\mu = \mu_T$)) なので振動型不安定.

$$8.8 \quad v(t) = e^{-\alpha'(t-t_0)}v(t_0) - \frac{g}{\alpha'} \left(1 - e^{-\alpha'(t-t_0)}\right) + \beta' I \int_{t_0}^t e^{-\alpha'(t-\tau)} dW(\tau).$$

$$t \rightarrow \infty \text{ では } v(t) \approx -\frac{g}{\alpha'} + \beta' I \int_{t_0}^t e^{-\alpha'(t-\tau)} dW(\tau).$$

8.9 下記のプログラム例により, $n = 100$ で 50000 回の施行を繰り返すことにより, 0.36588 (真の値は 0.3679) が得られる.

```

program napier
  integer :: i,j,k,itemp,isum
  integer :: n=100,nnn=50000,ix(100)
  real(8) :: x(0:100),y(0:100),temp,xr,probab,pi,aa
  pi=4.d0 * datan(1.d0)
  isum=0
  y(0)=0.3d0
  do k=1,nnn
    do i=1,n
      y(i) = 4.d0 * y(i-1) * (1.d0-y(i-1))
      aa = dsqrt(y(i))
      x(i) = 2.d0 * asin(aa)/pi
    enddo
    do i=1,n
      ix(i) = i
    enddo
    do i = 1,n-1
      do j=i+1,n
        if(x(i) > x(j)) then
          temp = x(i)
          itemp = ix(i)
          x(i) = x(j)
          ix(i) = ix(j)
          x(j) = temp
          ix(j) = itemp
        endif
      enddo
    enddo
    do i=1,n
      if(ix(i) == i) then
        isum = isum + 1
        go to 10
      endif
    enddo
  enddo

```

```
10 continue
   y(0) = y(n)
enddo
  probab = dble(nnn-isum)/dble(nnn)
  write(6,100) probab
100 format(2x,' probab = ',f12.5)
end program napier
```